

## 日本語讃美歌のための音楽

Music for Japanese hymns

カールス著

手代木俊一訳

Translated by Shun'ichi Teshirogi

### はじめに

日本の讃美歌を扱った論文の中で、タイトル中に〈讃美歌〉、〈聖歌〉、ないし〈HYMN〉、〈SACRED SONG〉という言葉が最初に現れる論文は、Carles著の“*Music for Japanese hymns “The Chrysanthmum.”* vol. 2 (1882) であろう。

カールスはペンネームと考えられ、この *Music for Japanese hymns* および “The Japan Weekly Mail” のコレスポンダンス（通信）欄への投稿 Music in Japan (To the editor the “Japan Mail” )、To the editor the “Japan Mail” <sup>(註1)</sup> の文体・内容から1884年頃には東京に在住していたイギリス人で、欧米ばかりでなく日本の文化に精通。音楽学者か、音楽の分析をかなりできる人物で、論題のたて方から聖職者かその職に近い人物であることも否定できない。しかし、当時のディレクター等からは今のところ人物を特定できてはいない。

この論文が発表された明治15 [1882] 年は、組合教会がすべての歌詞に楽譜を掲載した本格的讃美歌集『讃美歌并楽譜』を刊行、一致教会（改革派・長老派）も『讃美歌 全』（楽譜附の版も予定していた）を刊行し、讃美歌集のレベルが一気にアップした年だった。このような時代背景の中で日本における最初の讃美歌論が生まれたことは意義深いと考える。ここに全文を訳出してご紹介したい。

### 日本語讃美歌のための音楽

カールス

(明治15 [1882] 年)

現在、この問題に対し、信頼にたる回答が得られるべきであるという、共通の願いが存在しているようである。そして、筆者がここに論説を書くことによって、その回答が得られるのではないかという期待も存在している。すなわち、もしこれ以上この件に対して意見がほとんどないのならば、日本語讃美歌のための音楽に関する問題と、同じ問題としては部分的ではあるが、創作であれ、翻訳であれ、讃美歌の韻律・詩形の問題に決着をつける時が到来したように

思われるのである。

日本の讃美歌は、単に一次的な間に合わせの、または直訳の段階を既に越えてしまっている。われわれの希望は、古い愛唱讃美歌がイギリスやアメリカがそうであったように、現在使用している讃美歌の何曲かが日本で歌い継がれて行くことである。受け継がれていくには詩の趣や音楽によるところが大きい、同様に日本語に関する学識の問題も大きいということが指摘されよう。そして、これらのことは、まず音楽を分析できる耳を持った者によって解決されるべきことなのである。

讃美歌の曲に関するわたしがこれまでに聞いた回答とは、格言「人の数と同数の意見がある」<sup>(註2)</sup> という域をでないものであった。ここで人とは、無垢な男性・女性・子供、すなわち人類そのものを示している。しかし、曲に関する回答は二つの極端なものに単純化され、そして第三の立場も考えられよう。それは、(1)イギリスかアメリカの曲そのもの、(2)日本の詩形に合った曲、(3)可能な限り両者の中間、である。

(1)について考えると、日本の詩形（ミーター）に適合する西洋の曲はもともとない、ということが言える。そこで、まず、日本人は西洋の音楽を修得しなければならない。イギリスの曲は、讃美歌には合っている、未開(?)の日本の曲に歌詞を合わせるより、何が讃美歌の曲として適しているのかを教えるほうが、より重要である。

しかしながら、わたしにとって、たとえ上記のことが的を射た答だとしても、身勝手な答であるように思われる。疑いもなく、外国（欧米）の音楽はわたしたちにとっては自然なものとして受けとめられている。しかし、西洋音楽はキリスト教の欠くことのできない要素というわけではない。西洋音楽自身が理想的だというわけではないので、われわれよりも、むしろ日本人にとってやりやすいことを考慮すべきである。日本の会衆にとって、まったく耳新しい異国の旋律よりも、日本の独自のスタイルにそったものを採用する方がはるかにやさしいのは明白な事実であるからである。

翻訳歌詞をそのオリジナルな曲に適合させようとしている人がいるが、その必要性がわたしには判らない。歌詞と曲がたまたま合うことがあるが、もし合わなかったら、翻訳を台無しにするより、別の曲を採用するほうがよいことは確かである。

疑いもなく、キリスト教主義女学校では欧米の、あるいは日本の伝統音楽ではない音楽を教えることができる。しかし、すべての教派が女学校や合唱の先頭にたつ女声コワイアーを持っているわけではない。われわれが求めるものは、将来すべての会衆が（老若男女を問わず）——例えば、野外説教の最後に歌う頌栄やわれわれ正規の教会員以外の人々がともに歌うことのできる簡単な讃美歌を——歌うことができるようになることである。この場合の曲は、いきいきとしており、常に欧米人にやかましくいわれる必要のまったくないものに違いない。ダー

ウィン氏が言うように、適者生存の一例なのである。そして、問題は何が適者なのかということである。

(2)に対する回答は、もっはら日本の詩形である七五調、そして三十一文字によるものである。そして、日本人にとって一般的な歌い方である声を震わして歌う歌い方では西洋の讃美歌を歌うことは望めないとわたしは考えている。しかし、讃美歌を七五調で創作する、また翻訳することはできる。6シラブルのうち5番目のシラブルが、長音符、またはタイでつながれた音符を含み、6・5のミーター（詩形）の英語讃美歌が幸運にも多く存在する。タイでつながれた音符のタイをとることで、または長音符を二分割することで、ミーター（詩形）が6・5の讃美歌はすぐに七五調にすることができる。そしてこの工夫はかなりの成功をおさめ、用いられているのである。

故国の友人は、日本の様々な韻律・詩形に合う曲を書いている。しかし、これらの曲は、聞いてみると凝りすぎている。現在ともかく望まれている曲は、まったく臨時記号のない、そして難しい4シラブル、7シラブルをすべて排除した、可能なかぎりシンプルな曲である。わたしは、曲のどこで臨時記号が使われるのかを注意深く耳で聞き、検討してみた。その結果、われわれ欧米人がごく自然に歌える箇所でも、日本人にとっては歌うことがほとんど困難で、そのことが常に起こる箇所があるということが判った。例えば、よく知られた讃美歌で、7シラブルが4回（4行）続く、ガントレット博士作曲《University College》<sup>(註3)</sup>の2行目には、ナチュラルがあり、一時的に属調のハ長調に転調する。この小節の音符はシ（B）のフラットだが、ナチュラルのため高音のシ（B）の音で歌い始めなければならない。しかし、日本の会衆（女学校のコワイアーを除く）は、シ（B）のフラットで歌い、どんなことがあっても、はっきりとしたシ（B）の音では歌っていないことに、わたしは気付いたのである。

*Hymns Ancient and Modern* に収録された讃美歌で、今まで述べた理由により、たやすく七五調に変えることができる讃美歌がある。例えば、第91番、第333番、第390番、第391番、第392番である。また、第74番は7・5のミーターである。そして、第22番、第163番、第210番は、7・7・7・5のミーターのため、日本のミーターとしてリストに加えても良いかも知れない。ここにまず歌い始めることのできる上記15曲のリストがある。これに、*Church Hymns* と *Hymnal Companion* を加えれば、日本の讃美歌に適した讃美歌をかなりの数見いだすことができるであろう。これらの讃美歌は素晴らしい曲ばかりであるが、日本人が歌うには、難しかったり、他の理由から適切とは考えられないものもあり、約半分はこれらの讃美歌のうち除かれる必要がある。上記3種の讃美歌集は、イギリス国教会で通常使用されている三つの讃美歌集である。

(3)の回答に関して言うならば、すなわち、日本の音楽とわれわれ西洋音楽のどちらかを使う、

というように限定するのをさけるためには、われわれ自身が適用範囲の限定をまったくしないためには、西洋音楽が主に弱強格（CM、LM、SM、7・6、etc.,）である一方、日本のものは主に強弱格であるということにまず留意すべきである。日本語は最初のシラブルにアクセント（強勢）があるように思われる。それゆえ日本人はわれわれ欧米の強弱格（7・7、8・7、6・5）の曲をかなり上手に取り入れている一方、弱強格の曲を歌い始めようとする場合戸惑っているように思える。もしそれが、LM（ロング・ミーター）ならば最初の音符にアクセントのある《Sun of My Soul》のような曲を薦めたい。この場合、語順を理論的になるように変えることはもちろんのことである。イギリス国教会讃美歌集の讃美歌のうち2篇の讃美歌は教義問答を教える教師によって創作されたものである。ひとつは、7・7・7・7・ で、もう一つは 7・5・7・5・7・5 である。

さて、われわれは、イギリスの古い（中世）音楽に立ち帰ってはどうかであろうか。イギリスの古い音楽には、ほとんど4シラブル、7シラブルが存在しない。日本の伝統音楽にみられるようなルーラード（回転）が頻繁に見られる。（例えば、《Good King Wenceslas》や *Helmors's Christmas Carols* に収録の曲）。この時代の音楽は近代の音楽よりはるかに優れていると一般的に考えられているのに残念である。ポール博士は次のように述べている。「パレストリーナやその時代の作曲者の音楽を模倣すべきであると、わたしは考えている。」

詠唱に関していえば、われわれの多くはおそらくアングリカン・チャントを歌っている。ここで再び中世の音楽（グレゴリアン・チャント）の問題が登場する。中世の音楽は日本音楽の様式に似ているような気がするのである。わたしは、アングリカン・チャントの方を絶対的に支持し、グレゴリアン・チャントをまったく受け付けないが、その立場から離れて以下論述する。グレゴリアン・チャントの楽譜には、記号というものがまったくない。そして、しばしば近代の音楽では見られない長2度で終わる。わたしが楽譜を持っている三味線音楽も長2度で終わる。それは、ピアノの黒鍵だけで演奏される類の音楽（5音階）である。

この雑誌『*The Chrysanthemum*』の読者のなかで何人かは、わずかであっても日本の曲を収集することができたのであろうか？ おそらく、多くの人は日本の音楽に対し、それを取り巻く環境から悪い連想を持っている。しかし、好まれている英語の曲でも同様なことがいえる。例えば、《*Helmsby*》や、古い曲《*Lo, He comes with Cloudes Descending*》は、フランスの道徳的とはとてもいえない歌である。また、《*Sun of My Soul*》の曲としていつも歌われている曲が、実はイタリアの酒場の歌であることが最近判った。イギリスでは、一般に「悪魔はよい曲のすべてを所有している」と言われてきた。われわれは、ここ日本で悪魔の所有ではない、よい曲を何曲か手中にすることができないのであろうか？ または、少しでも悪魔からよい曲を盗み取ることはできないのであろうか？

(注1) To the editor the "Japan Mail," *The Japan Weekly Mail*, Oct. 25, 1884.

Music in Japan; to the editor the "Japan Mail," *The Japan Weekly Mail*, Nov. 1, 1884.

*The Japan weekly Mail* のコレスポンダンス (通信) 欄に、1884年9月20日から1月15日まで7週間 "Relegion and Yamato-Damashii" というタイトルでペンネーム A TOKIYO PROFESSOR, MUSICIAN, C.S.E., A.B.C., SCIENCE, 及び C.G.KNOTT によって繰り返された論争に加わっている。上記資料の存在は洋楽史研究者故中村理平氏にご教示いただいた。

(注2) 古代ローマの喜劇作家テレンティウス (紀元前195頃-159) の芝居『ポルミオ』の中に出てくる言葉 "Quot homines, tot sententiae."

(注3) 楽譜《University College》。

### General Hymns.

#### Hymn 291.



"Fight the good fight of faith, lay hold on eternal life."

<p><i>mf</i> <b>O</b>FT in danger, oft in woe, Onward, Christians, onward go; Bear the toil, maintain the strife, Strengthened with the Bread of Life!</p>	<p>Onward then to glory move; More than conquerors ye shall prove; <i>dim</i> Though opposed by many a foe, <i>f</i>. Christian soldiers, onward go!</p>
--	--

<p>Let not sorrow dim your eye, <i>cr</i> Soon shall every tear be dry; <i>mf</i> Let not fear your course impede, <i>f</i> Great your strength, if <i>dim</i> great your need.</p>	<p>Hymns of glory and of praise, <i>mf</i> <b>F</b>ATHER, unto Thee we raise: Holy JESUS, praise to Thee With the <b>S</b>PIRIT ever be.</p>
---	--

*mf* Let your drooping hearts be glad;  
March in heavenly armour clad;  
Fight, nor think the battle long,  
*f* Soon shall victory wake your song.

